第 185 回「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

「壁を乗り越える」 ～ 人生の妙味 ～

2023 年 7 月 6 日、ルーテル学院大学で『総合人間学』(テキスト『がん細胞から学んだ生き方』) (10:40～12:10)と『現代生命科学』(テキスト『カラーで学べる病理学』) (13:20～15:00、15:10～16:50)の 3 コマの授業に赴いた。

『総合人間学』では、【『がん細胞から学んだ生き方』第 1 章「医療者として原点：畳一枚ほどの墓 & 首尾一貫する大切さ & 新渡戸稲造(1862-1933)の『桃太郎』 & 人生は開いた扇 & ノーベル賞受賞者数のノルマ & タブーになった尊敬する人物 & 国際人と肝臓の特徴 & 真の国際人と「温故創新」】を音読しながら進めた。 誠実な質問が多くあり 大変有意義な、充実した時であった。『現代生命科学』では、【『カラーで学べる病理学』の「感染症」&「代謝異常」】を音読しながら進めた。 真摯な姿勢には、大いに感激した。

帰宅したら、出版社から新刊『新渡戸稲造「壁を破る」言葉 ～ 逆境に立ち向かう者へ ～』（案）の進捗状況の連絡があった。【人生には、仕事の壁、環境の壁、人間関係の壁、お金の壁、老いの壁、病気の壁など、たくさんの壁があります。 この壁を強く、たくましく、賢く乗り越えるためのヒントを新渡戸稲造の言葉から学ぶ本、というイメージです。】とのことである。 今年の 9 月発行の予定とのことである。 実現したら、歴史的快挙となろう！

『元来、人生は悲哀に満ちたものである。 でも悲哀はけっして悪いものではない。 宇治の玉露が、味わううちに言い知れぬ深い味を感じさせるように、悲哀は人生の妙味である』(新渡戸稲造) 『人は、ただそこにいるだけで価値ある存在』&「大事なのは『何かをなすこと（to do）』ではなく、『あること＝to be』」

『がん哲学外来』で筆者がかけるのは、『言葉の処方箋』である。人間は、『よい言葉』を持つことで、いまよりもずっと楽に生きていくことができるはずであろう！ それを軸にして物事をプラスに考えられるようになるからである。 まさに『初めに、ことばがあった。―― 光はやみの中に輝いている。』（ヨハネの福音書 1 章 1 節～5 節）の復学の日々である。